

ラテンアメリカ都市物語

＝第23回＝

試練の続く
ハイチの首都
ポルトープランス

水野 光明

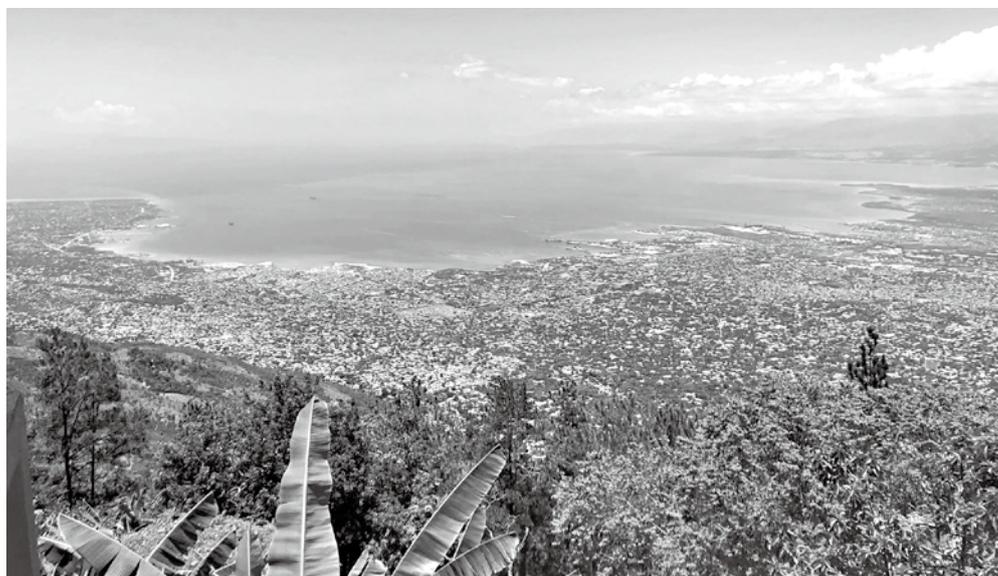


写真1：ポルトープランス遠景（写真はすべて筆者撮影）

街の起源

ハイチ共和国の首都ポルトープランス（Port-au-Prince: PAP）は、フランス語で「王子の港」を意味する人口約300万人の都市である。1749年にフランス人入植者達が海岸沿いの現在のベレール（Bel Air）地区に砂糖農園を開拓したのがこの街の起源である。その後、急速に発展し、1770年にはフランス植民地政府の首都が北部のキャップ・フランセ（現在のカパイシアン）からここに移された。フランス革命政府時代には、ポルトー・レプブリケン（Port-au-Républicain - 共和主義者の港）と呼ばれていたが、1804年のハイチ独立とともに新独立国家ハイチの首都になり、初代国家元首のジャンジャック・デサリーヌによってポルトープランスと名付けられた。

ポルトープランスの街で目を引くもの

ポルトープランスの街を訪れて最初に目を引くのは、「タブタブ」と呼ばれる色鮮やかなタクシーである。軽トラックやワンボックスカーに、できるだけ多くの人に乗れるような改造を加えて、思い思いのカラフルな装飾を施して、幹線道路をひしめき合いながら走っている。このタブタブを、かつて流行した菅原文太主演の日本映画『トラック野郎』シリーズの色鮮やかなトラックのイメージと重ね合わせてしまうのは、私や私より上の世代だけであろうか。治安さえよければ、タブタブの美を競う日本大使杯ビューティー・コンテストなる企画を実現したかった。これは心残りである。

この街でもう一つ目を引くのは、急斜面の小高い丘に広がるスラム街である。2010年の震災後に被災



写真2:「トラック野郎」を彷彿とさせるハイチのタクシー「タブタブ」

者らが無計画にどんどん建てていったものと言われるが、全体を俯瞰すると絶妙に調和がとれて見えるから不思議である。これはハイチ人独特の美的センスによるものではないだろうか。

2010年大震災の爪痕

2010年1月12日のハイチ大震災では、ポルトープランスの西25km地点が震源地となり、約30万人に及ぶ犠牲者が出た。国連平和維持部隊に日本の自衛隊が派遣されたことで日本でもハイチのことが

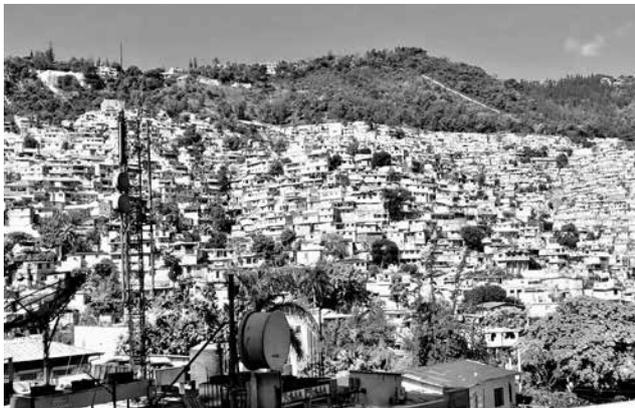


写真3:日本大使館から見たスラム街 ジャルジー

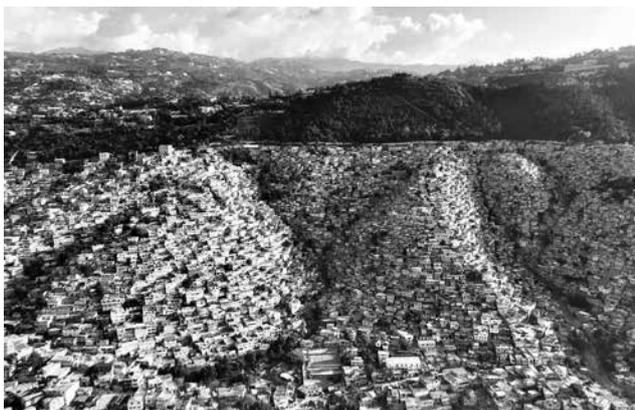


写真4:空から俯瞰したスラム街 ジャルジー

ニュースで頻繁に取り上げられるようになった。あれから10年以上経った現在も、大震災で倒壊した大統領府とポルトープランス大聖堂は再建されないままで、街のあちこちに震災の爪痕が残っている。

渋滞は治安のバロメーター

この街に住んで悩まされるものの一つは、車の渋滞である。都市計画が十分練られない間に人口と車両数が急増したためか交通量に比べて道路が狭く、ほんの数km先の目的地に行くにも1時間近くかかることも珍しくない。一方で、私の在任中、2019年には経済社会活動が麻痺する規模の暴力的デモや破壊行為（いわゆる「ペイロック」）が断続的に発生したり、2020年には新型コロナウイルス感染症（COVID-19）拡大にともなう非常事態宣言が出されたりして、街から人と車が消えてゴーストタウンのようになることがしばしばだった。治安状況によって渋滞の度合いが左右されるという意味で、渋滞はいわば治安のバロメーターで、街に出た時に道路が渋滞していなかったりすると、「はて、今日は何か暴力的なデモが予定されていたか？」と一瞬不安になったものである。

ギャングが支配する地区

ポルトープランスには、海岸沿いを中心にギャングが支配する地区があちこちに存在するため、移動の際にはそこに迷い込まないように十分気をつけなければならない。ギャングが支配する地区には、「ピラート」（海賊）のような如何にもという名前の他に、「シテソレイユ」（太陽都市）、「ヴィラーージュ・ド・デュウ」（神の村）のようなありがたいお名前や、「ポストン」、「ブルックリン」、「トウキョウ」と呼ばれるアメリカや日本の都市名を冠したものまである。魅



写真5:2010年の大震災で倒壊したままのポルトープランス大聖堂

力的な名前だからといって決して足を踏み入れてはならない危険な地区である。

ポルトープランスの脆弱な経済社会インフラ

ポルトープランスの経済社会インフラは、長引く政情不安と治安問題のため十分な投資が行われず、極めて脆弱なままである。ハイチにリピーターとして久しぶりに戻ったという国連や人道支援関係者達が、苦笑いを浮かべながら「あれから〇〇年経つが、ポルトープランスの街が全く発展していないことに驚いた」という感想を語るのを聞く度に、やるせない気持ちになったものである。ここでは、日常生活に不可欠な経済社会インフラストラクチャーである電気・水事情やごみ処理問題について簡単に紹介したい。

- ① 電気－電気はよい時でも一日6時間から8時間程度しか通電せず、通電時間も不定期で予測ができない。そのため、普通に電気のある生活をするためには家に発電機と蓄電器を備える必要がある。「24時間電化」は故モイーズ大統領の選挙公約の目玉として任期中には一定の成果を挙げたものの、今年7月に志半ばで暗殺されてしまった。今後、24時間電化が実現することが万が一あったとしても、きっとずいぶんと先の話になるだろう。
- ② 水事情－ポルトープランスでは、上下水道も一部地域を除いて未整備で、生活用水は、雨どいを使って雨水を貯水槽に溜めるか、数週間に一度、貯水槽に貯める水を注文してトラックで配達してもらう必要がある。
- ③ ごみ処理問題－街のごみ処理問題も深刻で、道端にはゴミが放置され、スコールのような大雨が降るたびに、ゴミが道路に溢れ出すことになる。朝の出勤時間に、ブルドーザーが前日の大雨で道路に流れ出した土砂やゴミをせっせと除去する光景は、ポルトープランスの雨季の風物詩ともいえるものである。

ポルトープランスの魅力

私にとって、ポルトープランスで一年を通じて最も楽しい年中行事はポルトープランス国際ジャズ・フェスティバル、通称“PAP JAZZ”であった。毎年1月に、米国、カナダ、フランス、カリブ諸国等で活躍するジャズ演奏家がポルトープランスに集結して1週間にわたりホテル、文化センター、レスト



写真6：ポルトープランス国際ジャズフェスティバルにて

ランで演奏する正真正銘の国際ジャズ・フェスティバルである。謝肉祭（カルナバル）も国民的な音楽と踊りのイベントではあるが、私の滞在した3年間は残念ながら治安上の理由でポルトープランスの街でカルナバルが開催されることはなかった。

ハイチ勤務では、ハイチ・クレオール料理をはじめとする美味しいレストランの存在に随分と助けられた思い出がある。治安上の理由で国内の移動が著しく制約される中、土曜の昼は、近所のレストランで妻と二人で食事をして気分転換をすることができた。

また、ポルトープランスはマイアミまで直行便で2時間足らずと地理的に米国に近いため、私がかつて勤務したアフリカのコンゴ民主共和国と比べて比較にならないほど生活用品や食材が豊富だったし、フランス語圏の国なのでフランス食材もいくらか入手できたことも有り難かった。

最後に、ハイチは、フランスのド・ゴール政権で文化大臣を務めたアンドレ・マルローから「最高の絵描き民族」と評されるなど、芸術の盛んな国である。ポルトープランスの街の道端では絵画を売っているのをよく見かけたし、街にはいくつものギャラリーが存在する。

ハイシアン・アートと呼ばれるハイチ人の手による絵画やメタルアートの中には、自由で、素朴で、才能にあふれた独創的なものがあり、大いに美意識を刺激されたものである。

ハイチの国宝を所蔵する国立パンテオン博物館のクロード・ルガニャール館長は著名な画家で、彼との交流はハイチの歴史と文化を理解するためにとても有益であった。こうした縁もあり、東京オリンピッ



写真7：ハイチの著名な画家ルガニヤール氏の画廊にて彼は国立パンテオン博物館の館長でもある（右は筆者）



写真8：愛知県幸田町とハイチのホストタウン記念切手
出所：日本郵便（株）発行「フレーム切手」

クで愛知県幸田町がハイチ選手団のホストタウンとなっていた際の記念切手にもハイシアン・アートを活用した。

ハイチでの勤務を終えた今、東京の家の居間を飾るハイチ絵画とメタルアートを眺めながら、ハイチでの暮らしや目まぐるしく起こった出来事を振り

返ったり、心を通わせることができた素晴らしいハイチの人々に思いを馳せたりしている。

（みずの みつあき 現外務省欧亜局アジア欧州協力室長兼政策課協定交渉官、前ハイチ大使）

ラテンアメリカ参考図書案内



『カリブ海アンティル諸島の民話と伝説』

テレーズ・ジョルジェル 松井裕史訳 作品社
2021年11月 288頁 2,600円＋税 ISBN978-4-86182-876-8

子ども時代をアンティル諸島で過ごし、クレオール語とフランス語を身につけている著者が、アンティルの島々の多くの人たちから聞き取り、フランス語に纏めた34編に挿絵62点が付された口承民話集。初版は1957年に刊行され以来、フランス語圏で広く読み継がれている。先住民のカリブ族の土地に侵入してきた欧州から来た征服者たち、アフリカから連れてこられた奴隷たち、クーリーや商店を営もうと移住してきた中国人、船乗りや海賊たちなど多くの来訪者がアンティル諸島にやって来て、サトウキビ栽培を主たる産業とし、フランスの植民地、今は海外県となっている歴史を反映して、グリムやペローの童話など欧州各地や米国南部、さらには中国由来とも思える似た話も多く、人間たち、ウサギなどの動物たちが活躍し、そして神様や悪魔たちの胸躍る民話は「言語と文化を越えて広い世界へ流通する」（記者あとがき）物語として楽しめる。

（桜井 敏浩）